

『最善に目を向ける』ヨハネ16:4-11

16:4 わたしがあなたがたにこれらのことを言ったのは、彼らの時がきた場合、わたしが彼らについて言ったことを、思い起させるためである。これらのことを初めから言わなかったのは、わたしがあなたがたと一緒にいたからである。

16:5 けれども今わたしは、わたしをつかわされたかたのところに行こうとしている。しかし、あなたがたのうち、だれも『どこへ行くのか』と尋ねる者はない。

16:6 かえって、わたしがこれらのことを言ったために、あなたがたの心は憂いで満たされている。

16:7 しかし、わたしはほんとうのことをあなたがたに言うが、わたしが去って行くことは、あなたがたの益になるのだ。わたしが去って行かなければ、あなたがたのところに助け主はこないであろう。もし行けば、それをあなたがたにつかわそう。

16:8 それがきたら、罪と義とさばきとについて、世の人の目を開くであろう。

16:9 罪についてと言ったのは、彼らがわたしを信じないからである。

16:10 義についてと言ったのは、わたしが父のみもとに行き、あなたがたは、もはやわたしを見なくなるからである。

16:11 さばきについてと言ったのは、この世の君がさばかれるからである。

●序論

先日の中央聖書神学校入学式。学校理事長・土屋先生のメッセージをオンラインで見ました。

彼らに向かい、「神の言葉を大いに蓄えて、そして、神の言葉を預かる者として成長してほしい」という旨のお話がなされたのです。

「神の言葉しか頼るところなし、神の言葉にしか命なし」と。

さて今日お読みした16章の最初のことはこうでした。

これらのことを話したのは、これからどんなことが起こっても、あなたがたがくじけないためです。(：1LB) 《信仰を捨てないためです(英訳)》

まだ弟子たちが経験していない迫害のこと、考えたくもなかったイエス様との別れのことを、ここでお話になっています。

今日覚えたいこと。そのすべてが神の恵みであり、最善であるとイエスさまはご存じであったということです。

●本論

I. 最善の時に語られた言葉

：4 わたしがあなたがたにこれらのことを言ったのは、彼らの時がきた場合、わたしが彼らについて言ったことを、思い起させるためである。これらのことを初めから言わなかったのは、わたしがあなたがたと一緒にいたからである。

イエスさまは、あえてこれらのことを「初めから言わなかった」と言われました。

なぜなら、今までイエスさまご自身が弟子たちと共にいられたからです。
必要な時に必要な導きを与え、弟子たちを守り、ていねいに育ててこられたのです。

でも今、イエスさまがこの言葉を語るのは、ご自身が地上を去る”とき”が近づいて
いたからです。

弟子たちが自分たちで福音を担い、そこで迫害にも直面することになる…。
その「時」に備えて、今こそ、それを告げる言葉が必要だったのです。

私たちも、人生の中で「もっと早くに知りたかった」「どうして今なのか」と思うこ
とがあると思います。聖書から語られる言葉もそうです。

しかし、イエスさまは、私たちがそれを“聞くためのタイミング”を知っておられる
のです。

神の言葉は、いつも遅すぎず、早すぎず、ちょうどよい時に与えられます。

だから、たとえ理解できない状況の中でも、「今のこの時に、聞くべき言葉として
心に留めよう。ここに、この時に、神の最善がある」と信じるのが大切です。

Ⅱ. 悲しみの中にも最善がある

(:5-6LB)しかし今、わたしは、わたしをお遣わしになった方のもとに行かな
ければなりません。それでもあなたがたは、わたしが何のためにそこへ行く
のか、知りたくないようです。だれ一人、どこに行くのか尋ねもしません。
かえって、わたしの話を聞いて、悲しみに心が満ちています。

イエスさまがいなくなる。それは弟子たちにとって大きな喪失です。

自分たちの命の希望であったお方が、自分たちの前からいなくなる…と言われる。
その言葉が現実になることを想像して、弟子たちの心は悲しみと動揺に支配されて
しまいました。

それでも、イエスさまはここで、その悲しみの中にも「最善」があると語られたので
す。

(:7LB)しかし、わたしが行くことは、あなたがたにとって一番よいことなの
です。わたしが行かなければ、助け手である聖霊はおいでになりません。行
けば必ずおいでになります。それというのも、わたしがその方を遣わすから
です。

改めて申し上げます。イエスさまは、わたしたちにとって「一番よいこと」を語られ
ます。これは信仰の事柄です。

この弟子たちのこれまでの経験は、イエスさまが目に見えていて、そばにいてくれ
て、だから大丈夫…と言えるものでした。

そんな彼らでしたが、そばにいるイエスさまがとらえられ、裁きにかけられ、犯
罪者として鞭うたれ、十字架につけられる姿を前に、イエス様から逃げ去ってし
まいました。

それは、イエスさまがいなくなって悲しい。裏切る自分自身が悲しい、情けない…、そういう悲しみだったでしょう。

そんな彼らは、復活のイエス様と出会いました。…でも、それでも、大丈夫ではない。イエスさまが天に上げられて後、イエスさまが遣わされた聖霊の体験を得て、彼らは本当の意味で、変えられて行ったのです。

まさにイエスさまは、わたしたちのために「一番よいこと」を約束し、また実現して下さったということです。あの十字架の苦痛さえも一番良いこととして受け入れてくださったのです。それがわたしたちの救いとなるからです。

さあ、私たちも、信仰の人生の中で「失う」経験や「終わり」の経験をします。人間関係、仕事、健康…。それはときに大きな悲しみとなり、神さまはいるのか？とさえ感じてしまうこともあります。

でも、そこでもイエスさまに頼り、御言葉の約束に頼ることで。
 その中でも、神さまは新しいご計画、新しい助けを用意しておられるのです。
 悲しみの中にある時こそ、神さまが与えようとしておられる「最善」を期待する信仰が必要です。

先日土屋先生は、御自分の娘婿に当たるミャンマーの伝道者の証しを紹介してくださいました。先日の大地震で、ミャンマーの親友が牧会するマンドレーの2つの教会が全壊したということだったのです。

土屋先生は、その話の中で、会衆に問うたのです。皆さんだったら、そんな状況下でどうしますか？…と。そしてこう続けられました。

その牧師はその瓦礫のわきで、集まってきた信徒の方々と共に主を賛美したというのです。そこでも、なお「主は生きている」と証しし賛美をささげたと。

彼らは、その現実の中で神さまを頼りにした、生ける神を見上げたというのです。いつでも、どんな状況の中でも、心を主に向けて賛美することができれば感謝です。そこに最善があります。

★ 最善とは、必ずしも「今うれしいこと」ではなく、「永遠に価値あること」に目を向け信じることであるからです。

Ⅲ. 聖霊が示す最善のこと

16:8 それがきたら、罪と義とさばきとについて、世の人の目を開くであろう。

ここは時間の関係上、次回に譲り短くお話しします。

最善のこと、それは、聖霊が「世の人の目を開く」ということです。

新共同訳聖書では、「世の誤りを明らかにする」と記しています。

イエスさまは以前、盲人のいやしを巡って、自分に批判を向けるパリサイ派の人たちに対してこう言われました。

…しかし、今あなたがたが『見える』と言い張るところに、あなたがたの罪がある。(9:41)

今のわたしたちの時代は、常識、道徳、そして物事の分別がある。「わたしには見えている」と、人は主張するでしょう。先日わたしは「日々の御言葉」グループでこう書いていました。

「世の誤り」という言葉に注目します。

今の時代にも、たとえば国によってその常識や認識がちがうことはわかります。ある人から見ると明らかな誤りも、その国では常識や正義と言われることもあります。

そんな現代においても、聖書はイエス・キリストを示すことで、まことの神を置き去りにした”世の誤り”を明らかにします。そういう”世の誤り”に挑戦しているのです。

ときには、信仰者のわたしたち自身の誤りにも気づかされることもあるでしょう。そういうとき、謙虚になって、神の語りかけに耳を傾けることができれば感謝です。

わたしたちはこの聖書という本を持っているだけでは不十分です。この聖書に記された神の言葉を神の言葉として示してくださり、悟りを与えてくださる方が必要なのです。

それが「聖霊なる神さま」です。

「助け主」と呼ばれるこの方は、何よりもまず、わたしたちが神さまの言葉を通して、わたしたちの目を開いてくださり、気づきと悟りを与えてくださいます。

ですから、御言葉を開くとき、ぜひ「聖霊なる神さま、助けてください、悟りを与えてください」と祈りましょう。

そうして、わたしたちには「この御言葉こそが頼りであり、またこの御言葉にこそいのちがある」ことを知ることができるのです。